

書評

外村久江著

『早歌の研究』

真鍋 昌 弘

早歌にはその多く作詞者と作曲者名が残されている。撰要目録などによつて我々はそれを知り得るのであるが、ただ残念なことに、その人名を具体的にはつきりさせるためには長い空白な時間がたちすぎていると考えられてきた。作者名がわかるということは早歌の性格や環境を暗示していることとがらの一つであり、同時に中世歌謡の一端として研究するにあつて、この半分はのめかされた基礎的問題点は、そのみにとどまらず、波紋をなして連鎖的に難しいしこりを各所に残してきたようである。作者・成立考は一つの研究部門となり得るであらうし、解明の方法として、国文学の緻密な姿勢をもとに、文献学的・歴史学的な照明が多く要求されるであらうことはあらためて言うまでもないことであつた。

書評 外村久江著『早歌の研究』

大和田建樹編『日本歌謡類聚』上巻、吉田東伍・野村八良共著『宴曲全集』などをはじめとして『当道の郢曲』にまみえ、その重要性を知らされて以来、高野辰之・藤田徳太郎氏などの多くの研究者の考察が加えられてはきた。当然、作者撰者についてある程度までは論考されてきたが、結局中断された状態であつたようであり、またその早歌が鎌倉期・室町期、そしてさらに下つた時代においても、どういう「場」で、どのように伝承享受されたかも詳しく知られなかつた。

さて、その面から注目されるものに外村久江氏の長年の御研究があり、作者・撰者考と早歌享受の諸相の究明が一つにまとめられて最近上梓された。この『早歌の研究』がそれであり、氏の研究の中核を物語つてゐる。一覧してわかるように、歴史学的態度を基にされ、その上に文献を自由に駆使されており、事実、文学としての歌謡研究の上に多くの意味をなげかけているものであるとおもわれる。又こういうように、諸面で比較的明確なものを引き出しうる歌

謡の存在にかえつて多様なおもしろさを感じさせてくれるようである。「宴曲とは何か」という問題にたちいる一つの、そして確実な指標であると考えられる。

以下わずかの紙幅をいただいて、紹介にもたらないことかもしれないが、おおよそ私には重要だと思われた点だけ掻い摘まんでおきたいとおもう。私のこの粗略な紹介では概要にすらならないのは当然であらう。

第一篇は「早歌の撰者・作者とその文化圏」であり、序章につづき各章の論題は

第一章、早歌の撰者並びに作者としての

明空

第二章、早歌の成立と金沢氏

第三章、早歌の流行と鎌倉の武士たち

(一、左金吾春朝。二、因州戸部二千石行時・附「永福寺勝景」)

「同砌并」。三、左金吾藤原宗光。四、藤原

助員・藤原親光・平義定。五、武士社会に於ける早歌の盛行。)

第四章、作者としての「藤三品」

第五章、早歌の撰者並びに作者としての月江(一、撰者としての月江。二、

作者としての月江。三、建長寺並びに円覺寺の作詞について。

第六章、作者「或女房」は阿仏尼か

第七章、早歌の作者とその社交圈——早歌は鎌倉幕府下に成立したか。

第八章、早歌と寺社——早歌はどうして鎌倉幕府下に成立したか。

である。第二篇は「早歌享受の諸相とその伝流」とあり、ここには早歌の実体とその背景、他芸能との関係、及び伝本などについて考察されていて、興味ある部分である。各章の題目を列挙しておく、次のようである。

第一章、早歌の伝流——特に口阿を中心として。

第二章、早歌唱詠の実際について。

第三章、鄧律講式としての早歌。

第四章、早歌の享受層について。

第五章、鎌倉地方の猿楽。

第六章、白拍子の歌謡と早歌。

第七章、早歌と曲舞・能楽との関係。

第八章、早歌十六冊伝本の研究。（これは六項目から成り、未発表のもの。）

そして最後に書物全体をしめくくつての「結語」がある。

第一篇では「撰要目録」に出てくる撰者・作者について、何時の何処の誰であるかを古文書の捜査から推定された。その目的と論旨の進展過程はすこぶる明瞭である。これらの考察によつて早歌の作者・撰者・作曲者等のうち、わずかの人をのこして、一応手がつけられたことになる。特に明空については、具体的な面とともに、その環境についても問題にするところが多々あつて、氏は先学の説——特に『宴曲全集』以来かかげられる「応仁略記」の「明空鄧曲の秘譜を製創し、鎌倉極楽寺良観上人が五段講式音楽として実用化した」との記述——をかかげられた後、それを参考にされ「明空を応仁略記の語る如く極楽寺開山良観房忍性と関係の深い人物で、鎌倉文化圏内の人」に絞り、「ところでそういう人物ならば良観房忍性が招じて第一代に妙性房審海を据えた金沢称名寺とも何等かの関係がありはしなかつたかと考え、古文書を探した所、明空なる人物の記載が三箇所発見出来た」

とされた。すなわち「灌頂役者交名」「某作善目録」「岩口村内河検見取帳」という、私などにとつては、まづたくめずらしい資料中の「明空」を指摘され、本文紹介と年代の上で吟味を加えられた結果、「鎌倉極楽寺又は三村寺と何らかの関連にある明空という僧侶がいたことがわかり、しかも時代的に早歌の作者と重なっている事を知り得た」（以上15ページ〜34ページ）と結ばれた。さらに金沢文庫にある早歌の断片（拾葉集上「金谷思」の一部にあたる）を載せられ、早歌に多く題材となつている源氏物語をはじめとする古典の写本やその貸借書状の金沢文庫に散見していることも参考にし「そういういつた北条金沢氏を中心とする鎌倉文化圏の中に早歌の大成者の出たことも偶然ではない」とつけ加えている。人物考の中でもまず第一におかれるべき重要なものであろう。いまのところ、これ以上確実性をもつ明空の比定者はうかばないであらうし、「個々の人々の時代や経歴・身分は勿論であるが、それらの人々の属した社会並びに文化圏というものが充分考察されなければ

ならない」と序章にもあるように、明空を通じて鎌倉文化圏に芽ばえ広がった武士層の歌謡としての早歌の性格があかるみに出てゆく点もうかがえる。

もう一人の中心的人物とされる月江についても、我々は明空と同一人説、別人説のあることを知っているが、外村氏は同一人説を資料の上から支持されている(102ページ～108ページ)。この点、問題は多くのこつてである。また月江の作品は一覧しても知られるように鎌倉やその周辺の寺社・風景を歌つたものが多いのであるが、建長寺関係では「得月宝池砌」(拾葉抄)と「巨山龍峯謔」(別紙追加曲)の二つが「現実の实况を把握したもの」であるといわれる。歌によみこまれている事物と、当寺の実際の記録や史料と対照させてみて、当時としては実景に即して作られたであろうことを推量されている。つまり「新興階級の新鮮な感覚と、トビツク的内容を含んだものであつたかもしれない。勿論、故事成語を連ね、歴史的な由来や、伝説文学の引用が主軸をなしている点に、過去の貴族文化を摂取する

ことによつて成立しているものである事は認めるが、しかし単なる懐古趣味に墮することなく、新しい動きに関心を持ち、求め且つそれに対応していることも知られる」(116ページ)とあり、又円覚寺関係の「鹿山景」(玉林苑上)についても同様に、その当時としては目新しい面をつかんで作つたものであるうとされる。宴曲というものに、歌謡の特性でもある当時性、時代性という点を具体的ににはつきりさせられたのは注目される。しかもそこには宴曲の独自性が見られるのであつて、私はあるいは貴族文学の中世的芽生えであり、又屈折であると思られる一面も今後詞章の上で具体的に照射されてしかるべきであらうかと思われる。ゆえに、早歌の中にある和歌や故事成語の一句は、他の新しい要素と組み合つて、当時の社会で、しかも具体的なその場において、単一な印象にのみおわらなかつたであらう。要するに早歌の地盤は鎌倉文化圏にあつたとされ、その上に立つてこの歌謡の性格を明らかにめんとされるのであつた。「能楽の先駆となるべき萌芽的存在」としての早歌の研

究がまずここからはじめられねばならないのは当然であらう。

当時、最も膾炙されたといわれる「花」の作者——藤三品の比定者藤原の広範についても詳しい考察がある。彼の三作が「祝言で結んでいるという事はやはり彼の作品の特色といつてよい事であらう」(96ページ)とされるのは早歌全体の性格からして、特にここだけに強調すべきことであらうかと思われもするが、南家貞嗣流の家系が多く文筆にすぐれた人物を生んでいて、彼の父の代より鎌倉幕府に関係をもつていたことは、明空の場合に照し合せて興味がある。しかも彼がもとと公家であるが、代表的宴曲を作つた点について、氏は彼がおかれた環境の点に及んで次のように結ばれているのは傾聴されるべきであらう。すなわち「何百年の伝統の下に専門化され固定化された家業を守っている京都の公卿社会の如き土壌には、早歌のような新しい形のものが芽ばえ成長することは困難ではなかつたか。こういう社会から離れて、一面細分されたセクシヨナリズムに拘束さ

れず自由であるが、他面「故郷隔而十万里、中腸空斷」（藤茂範奏状）といった郷愁にかけられるような環境が早歌のあのような内容形式を生んだと考えられはしないか」（97ページ）。私などもう少し詳しい説明を聞きたい気持であるが、事実、中世歌謡にも地方と中央（京都）という点に多くの問題点があつて、早歌にかぎらないことであらうと私も愚考している。同じく第一篇の六章では「源氏恋」「源氏」二曲の作者である「或女房」を阿仏尼ではないかという推論をたてておられる。氏も書き添えられるように疑問点がないでもないが、この比定は早歌の中世文学史上における位置という面でも興味がもたれる。これも前述の中央文化と地方文化の関連の一端ではあらう。ややもすると漠然とせざるをえない歌謡の世界で、阿仏尼が早歌創始への示唆と協力の機会をもつたのであつたら、それは早歌というものの新しい意味を我々に想像させるであらう。

其の他「左金吾春朝」「因州戸部二千石行時」「左金吾藤原宗光」「藤原助員」「藤

原親光」「平義定」についても考察を進め、それに相当する人物を推定、すべて鎌倉幕府下の武士層ではないかと考えられている（第三章）。このように、歌謡の作曲者として武士が登場していることをのべられたあと「早歌の成立期は北条氏の権力が増大しその被官等も地位を高めた鎌倉時代末期であつたから、これを反映して御家人と並んで堂々作者となつていたのであるまいか。鎌倉幕府上層武士が本来の乱舞宴酔といった無礼講ばかりではなく、幕府に於て半ば儀式に近い宴を多く持たざるを得なかつた事、その習慣が幕府以外の武士間の交遊圏にも浸潤してくる、そういった環境に醸成せられて結晶されたものがこの早歌ではなかつたらうかと考えられるのである」（77ページ）とあり、また「幕府の御家人中でも特に將軍に近接した家の人々にこの早歌の作者が多く見られ、特にこの中の、武士の場合は作曲者が大部分である。以上の事は代々の將軍の管絃・郭曲の奨励と深い関連がありはしないかと推察せしめられる。」（143ページ）とも書かれていて、早歌の題材と

なる寺社もやはり鎌倉と色々な意味で結びつき得るもので、歌謡として十分に消化されているようである。（第一篇第八章）

今様の性格でもなく、又田植草紙的な場に芽生えたものでもなく、早歌には、かくの如く比較的基礎的なものが明くなる可能性があつた。氏がたびたび「事実の記録ではないが」とことわりながら文学作品の一部を例証とされるが、このような、つまり、事実の記録にもとづく態度が十分に生きる研究部門なのであらう。歴史学の豊かな実証のよろこびが伝わるのは、ひとり私ばかりではなからう。ただその上に文学としての、各人の作品における微妙な相違点の分析、又出来るならばその背景の広い意味の民俗的諸面においても、問題は発展してゆくべきであらう。むしろこの書物に述べられたように、考証研究のまず大切なような、歌謡の世界では一種独自の雰囲気さえあるのだけれども、しかし、右述したようにいろいろな面で、早歌の世界にはまだ何かあつてほしいという、換言すればまだ何かほぐれないものが潜んでいるであ

ろうかという密かな期待が今後発展することとも考えられる。もちろん具体的な把握が必要であることは言うまでもない。つまり、我々はこの研究を大切な地盤として、その上で歴史文献でわりきれないものをもつと多くの面から着実に指摘しなければならぬであらう。

さらに第二篇の諸研究も注目される。作者・撰者考と並行して、早歌の実体——いかに盛行し伝承し享受され、どのような場で歌われたか——を考察されている。その第二章は早歌唱詠の実際についてであつて、早歌の歌われた場と曲目を資料のゆるすかぎりにおいて推定されている。

(ア) 郭律講として興行されるもの。

(イ) 室町將軍の式楽的存在として。

(ロ) 武士・公家・僧侶の種々の催し物に興を添えるもの。

の如く、三つの場合に分けられ、例えば(イ)では「祇園執行日記」にのる康永二年九月十三日、四条道場において、管絃者数人と早歌衆として神保入道・三島高阿弥・慈阿弥等の人々が参集して行われたものなど四

例を掲げられている。(イ)や(ロ)についても同様、公家の日記等から確実な例を引き、さらにそれらの場で實際如何なる歌がうたわれたかを見ておられる。曲目までわかるのは、右の(イ)・(ロ)の場合のことで、

(A) 観応三年(正平七年(二三五))仁平寺の延年で「心」が歌われた。

(B) 応永十五年(一四〇八)三月二十四日の北山殿で「花亭祝言」「花」「不老不死」「遊宴」「法華」「神祇」が歌われた。

(C) 応永二十四年(一四一七)十月三日と同二十九年(一四三二)三月七日に後崇光院が「神祇」「曉別」「花」を練習なさつた。

を見るのであるが、このわずかな実例は、その時代における早歌の実体を知る上で参考になる。その上に、ごま点のハカセや拍子の印、音階の書きこみなどを参考にすると、実景の想像ということが必ずしも困難ではないことを教えてくれる。ただこういつた上層部のあるいは儀式的な場におけるもの以外にも目はむけられる。氏もかかげられたように「閑吟集」中の早歌の断片や「七十一

番歌合」の露曲の一片の如く、(他に徒然草や太平記の例を参考として)広く見たし、同時代の芸能への影響ということも考慮に入れて、この早歌が時代の流れの上にどのよう生きてきたかという点についてはさらに多くの問題も生れそうであつて、私などおおいに興味を感じる。また資料の上から見て「花」の曲が好まれたということは、広く我が国の性情に照し合せてみることであるとともに、あるいは花がはなやかで目出度いものという漠然とした意味にとどまらず、つまり「呪的な觀念」の、武士層の歌謡としての現われたであつたかとも私は愚考してみる。

室町期を通じて、やはり相伝は続いたようである。坂阿・清阿とならぶ室町期の名人——口阿についての見当もみのがすことはできない(第二篇第一章)。口阿によつてまだまだ早歌は現実に生きていたとされるが、ただその流れは樂觀的ではなかつたようである。つまり新興の猿樂の能が將軍の庇護のもとに隆盛してきたと言われる。氏はさらにつづけて「二者ともに同時代に並

存して、武士の社会に用いられている事は注目すべきである。しかも、早歌は公家の雅楽・催馬楽・朗詠等と同じように、武士達が身をもつて歌つたものであり、能楽はその当時は猿楽者達に演ぜられて、武士は専ら観賞する側にあつた点に大なる相違を見出すのである」(199ページ)と述べられている。この先行歌謡たる早歌が、猿楽の能のかけにしだいに隠れてゆく過程は多くの問題点があろう。その衰退の様相は注目される点である。ひじょうに接近した時と場の上に立つこれら二つの歌謡には、目に見えない交流と反発の背景が思われてならない。たしかに、氏の言われるように早歌は中世芸能を明らかにする点においては一つの原点であると言えよう。私には、このところを噛み砕いて解説する含蓄はないが「武士層の生活に密着した歌謡」(329ページ)であることと共に、時代が室町に下るにつれてその生活の中で、早歌がいかに動揺したかと思われ、今後多くの問題の発展があつてしかるべきであらう。

「張り交ぜ屏風」や「つづれ錦」という

評語も見当すべきであると助言されている。多くの研究者にそれぞれ思いあたる点があるはずであり、そういう面でも宴曲は当然考え直される必要があつたのである。つまり時代性を忘れるわけにゆかないであらう。右の二評語もどういう意味でそれを用いるかが問題である。氏の歴史学的文献学的立場からしても、この歌謡を「信仰と熱情の絶無」「生気の欠乏」(高野辰之『日本歌謡史』)とし、又「宗教も情熱のある信仰の方面を外にして傍観的態度を以て之を叙し」(「熱のない恋の叙述」(呉文炳『日本演劇の起源』)などとして一概にかたづけてしまふわけにはゆかないであらうと思われる。この点からも、又のちに氏の詳しい御研究があることと思われる。

おわりに一つ付け加えておきたいことは、昭和三十六年の秋であつたか、私は後藤丹治博士から宴曲の概説的なことをお聞きする機会をもつた。亡くなられる一年半ほどまえであつた。博士の例の緻密な宴曲に対する造詣を改めて知ることが出来たのであつたが、私にも色々質問されて、恐縮しき

つたことがあつた。その談合の中で、二・三度、外村久江氏の金沢文庫捜査による御業績をたたえられたことがあつたのを思い出す。私はそのころ宴曲集と宴曲抄あたりまでしか目を通していなかつたのであるが、それを機会に外村氏の二つほどの論文を読ませていただいたのであつた。そしてその後、新間進一氏や乾克己氏の御研究の一端を拝見する機会があつたが、全体としての早歌研究の着実な進展は私にもよい参考になつた。このたびこの書物を拝見してあらためてその御努力に敬服する次第である。歌謡に関心をもつ私は、これからも幾度かこの『早歌の研究』のページをくらなればならないであらう。ただ浅学の私にはこういう労作の書物の紹介は適さないようであつたが、以上簡単に述べたように私自身種々の興味を隠し得ないのである。特に第二篇においては多くを言い落しているが、次の何かの機会に補いたいと思つている。御容赦を乞う。

(昭和四十年八月発行。至文堂刊。定価一七〇〇円)
——昭和四十年十一月——